

## 講義内容への質問、講義方法への希望、等々

### <都市化と近代化>

- ・農村が都市化することのメリットは、あるとしたらどんなものがあるのでしょうか？  
→私が申し上げたのは、「多くの人は近代化のことを都市化と言っている」「都市化の否定はしないが、近代化が重要である」ということです。「都市化」のメリットを一言で言うと、各施設等へのアクセスの利便性です。同時に渋滞や自然の減少というマイナスも出てきます。

### <計画のあり方>

- ・今回の講義では、都市・農村を完全に分けて土地利用を考えていましたが、都市に農地を組み込むような土地利用は実際にされて（考えられて）いないのでしょうか。  
→あります。一部ですが、「農のあるまちづくり」「都市農業」も始まっています。この動きを担保するために、都市農業振興基本法も2015年に制定されました。

### <平坦地での整備と傾斜地での整備>

- ・農地の区画整理と棚田の保全是（農業の効率化という面では）相反するように思われるが、棚田に特有の何らかの機能があるのか？  
→棚田は元の地形に合わせた様々な形状をしています。また土の法面（のりめん）や石垣が、美しさを演出しています。様々な形状でありかつ小さな区画は作業効率が悪いです。そこで区画整理をすると、作業性は高まりますが、美しさが損なわれるのではないかと、言うのが質問の趣旨ですね。結論から言うと、棚田の美しさを保全しながら農地の整備が行われています。ただし平坦地のように大きな区画にすることは不可能ですので、労働生産性の向上は、限られています。
- ・文化的景観の保持と近代化の間で摩擦があったことはあるのか。  
→あります。が、最小限にする努力が行われています。農地を主とする文化的景観については、上記の通りです。建築物については、利便性を向上させデザインを損なわない工夫がなされます。

### <農地利用の集約化>

- ・臼井第一地区のような農業のしかたは、普及しているのか、していないのか？その理由は？  
→臼井第一地区の特徴は二つあります。一つは大区画への整備、もう一つは、そこでの営農です。大区画化は全国でかなり進んできて、全水田の一割まで来ました。営農は、大規模に営農する個人、大規模に営農する法人、集落で協働で行う集落営農など、いろいろなパターンがあります。次項の「地域農業マスタープラン」づくりが、それをサポートします。

### <集落移転と農民のマインド>

- ・「地域農業マスタープラン」や「計画的集落移転」で農家たちが土地の貸出や居住地の移転をやっていたわけですが、農家って頑固なイメージも多少あって、「快諾しすぎではないか」と思った

のですが、意外と農家って土地への固執より現状の改善を望む柔軟性があると捉えていいですか？

→集落移転はそれほど多くありません。最もうまくいったケース（のひとつ）として紹介しました。現状の改善については、農村の人、都市の人ともに望むのではないのでしょうか。

なお、土地への固執については、全国的にも、かなり弱くなっているように感じます。

- ・ 雪かきは、家の前に雪が除せられて家から出られなくなったり、除雪車のせいで渋滞が発生したり（登校・出勤時間に直撃）して、自分で雪かきする以上の苦難が実はあつたりします。

→ですね。

- ・ 集落機能の維持のための新しいパラダイムに必要な技術等を具体的に知りたいです。

#### <食料自給>

- ・ 先生は適切な食料自給率、また現実的に達成可能な自給率は、それぞれどの程度だとお考えでしょうか。

- ・ 農業人口の減少または高齢化により現在の農地面積を維持するのはより困難になると思われるが、農地面積が減るのはほんとうに良くないことなのか？

→いま起きている米中の貿易摩擦のように、自国主義が強まっていくのであれば、自給率は高いほど良く、究極は100%です。ですが、本来は国同士が協調して、得意分野で分業してゆくの「あるべき国際社会」ですので、自給可能な分は自給すべき、食品ロスを減らす、食習慣を変える等の努力が必要と考えます。数字でいえば、当面の目標は50%でしょうか。

- ・ 問題になるのは、一度農地としての利用を止めてしまうと、再び利用しようと思った時に農地として復活させるのが困難なことだと思われる。そこで農地として維持することが困難になった時に、農地としての能力を維持させたまま、土地を保存するために、どういうことをしているのだろうか？

→それをしていないことが問題なのです。草刈りをしたり、樹木が生えて来ないようにすれば、必要な時に復旧しやすいですが、農地利用を止めた（耕作を放棄した）人は、それも行いたくないのです。

#### <棚田オーナー制度>

- ・ 都市部の人口集中や集落人口の減少の歯止めに固執するのではなく、都市住民を棚田のオーナーとしたり、計画的な集落移転をしたりするアプローチは、個人的に斬新だと思いました。

→集落移転は、1970年頃から始まっています。それを支援する法律・事業もあります。ですが、数はそれほど多くありません。

- ・ 棚田オーナー制度で得た収穫物による収入は、オーナーの生活資金になるので、オーナーはそれ以外の仕事をしないのか、それともオーナーは農業の副業的にこなすものなのか。

→まず、棚田オーナー制度を正確に理解して下さい（スライドの65、66番）。オーナーは都市住民です。地権者（土地所有者）が地代を得ます。しかしその地代は、大山千枚田では、3000円/100平米です。これだけでは生きていけませんね。

### <グリーンツーリズム>

- ・ エコツーリズム・グリーンツーリズムは、実際のところ効果を上げているのですか？  
→効果の定義によりますが、上げています。
- ・ グリーンツーリズムが欧州で一般的だとおっしゃってましたが、外国人観光客が日本の農村を訪れることはあるのでしょうか。  
→近年のインバウンド観光客の増加は、農村観光にも及んでいます。2018年9月には、ドイツ人、ペルー人、フランス人、台湾人を案内しました。その後彼らだけで行って貰いました。2019年9月には、初来日するオーストラリア人が熊野古道を目指しています。これから助言を始めます。
- ・ 農地集落を観光資源として生かすのは名案だと思いますが、かえってそうした利用が集落の人々にとって負担になるという側面はないのでしょうか（美瑛の例は極端な例だと思うのですが、もっと集落の住人の生活レベルでの問題はありますか）  
→大山千枚田で田植えや稲刈りの時には、大勢の人が多数のクルマで訪れ、渋滞を引き起こすこともあります。他の地区でも、外の人に近所を歩き回ってほしくないと思う人は多くいます。

### <村づくり>

- ・ 出身が秋田県にかほ市なのですが、にかほの偉人、斎藤茂吉・憲三父子の取組み（乾田馬耕の導入、農地整備、農家の次男以下の働き手としての工場建設→後のTDK）とかなり似通ったところがあったので、驚きでした。歴史的な取組みとしてちらっとでも紹介いただけたら、非常に嬉しく思います。  
→ここに書くことで良いでしょうか。  
→にかほ市のウェブサイトによると、斎藤憲三さんはTDKの創始者に間違いありません。お父さんの名前は宇一郎のようです。農業の発展に尽力したことは間違いありません。

### <その他>

- ・ 資料が充実していて、農村の行っている活動やその魅力に触れられました。  
→どうも。
- ・ 渡嘉敷・座間味村は沖縄の島です！！  
→ですね。

以上